

菊池ゴードンの対人関係価値調査表による 介護福祉科学生と看護系学生との比較研究

藤田 俊夫, 藤原 芳朗, 原田 由美子

Comparative Study between Students of Care Work and Student Nurses by Kikuchi-Gordon Survey Interpersonal Values (KG-SIV)

Toshio FUJITA, Yoshirou FUJIWARA and Yumiko HARADA

キーワード：対人関係価値, 介護福祉, KG-SIV

概 要

介護福祉士は身体に障害を持つ人や重症心身障害（児）者等のいわゆる社会的弱者、あるいは、寝たきり、痴呆といった要介護の高齢者を処遇の対象としている。介護福祉科の学生の対人関係価値とはどのようなものであろうか。対人価値観の測定には Gordon¹⁾による対人関係価値尺度 (Survey of Interpersonal Values) が使用される。わが国では菊池²⁾によってその日本語版 Kikuchi-Gordon Survey of Interpersonal Values (KG-SIV) が作成されている。KG-SIV を用いて調査した結果、「支持」が最上位価値にあることが分かった。介護福祉科学生の結果と看護系学生のそれとを比較してみると、「同調」については看護系学生の方が有意に高く、「承認」については介護福祉科学生の方が有意に高い、「博愛」については看護系学生の方が有意に高いなどの特徴が見られた。

1. 緒 言

介護福祉の領域で求められるのはどのような人間であらうか。まず介護を必要とする人は、何らかの障害を持っている高齢者、身体障害者、あるいは知的障害者など、生活していく上で自分ひとりでは困難を感じる人たちである。そうした人を援助の対象とする介護福祉士をめざす学生は、どのような対人価値観をもっているのだろうか。永田ら³⁻⁹⁾は看護系学生を対象に、対人関係においてどのような価値観を持っているのか調査研究している。今回、我々は永田氏の好意により KG-SIV 調査用紙を使用して調査することができた。SIV プロフィールを職業別に分析した Gordon の研究をはじめ、日本の看護系学生についての調査では「同調」と「博愛」の価値領域で得点が高く、「独立」領域で低いという結果が見られる。

看護も介護福祉も対人的な業務であるという点では同じであるが、看護が医療というものに軸足を置くの

に対して、介護福祉は福祉というものに軸足を乗せている。その違いが介護福祉科の学生の対人関係価値に影響を及ぼしているのだろうか。

本研究は介護福祉士を目指す学生と看護系学生に対して対人関係価値調査を行い、彼らがどのような対人関係上の価値観をもっているのか、また看護系学生の価値と介護福祉科学生の対人関係価値のどの部分に相違が生じるのかを明らかにする目的で行われた。

KG-SIV では対人関係価値を次の6価値領域、すなわち支持、同調、承認、独立、博愛、および指導について点数化している。各尺度の最大値は「承認」が26、「支持」、「同調」、「博愛」がそれぞれ30、「独立」、「指導」がそれぞれ32である。6つの領域の意味は次のようである。

1) 支持 (Support)

他人から理解をもって扱われ、勇気づけられ、親切や思いやりをもって扱われること。

[質問例]

- 他人が私のすることに同意してくれる。
- 人々が私に気をつけてくれる。

2) 同調 (Conformity)

決められた規則に従い、社会的に妥当な行動をする、

(平成14年10月15日受理)

川崎医療短期大学 介護福祉科

Department of Care Work, Kawasaki College of Allied Health Professions

他者から受け入れられる行動をする。

[質問例]

- ・規則やきまりをきちんと守る。
- ・自分の義務をはたす。

3) 承認 (Recognition)

他人から尊敬され、賞賛され、重要な存在としてみられ、好ましいと思って注目され、認め受け入れられること。

[質問例]

- ・他の人から私のすることが注目される。
- ・私のすることが他人からほめられる。

4) 独立 (Independence)

自分の思うように行動すること、自分自身の決定を大切にし、他人から指図されないこと。

[質問例]

- ・完全な個人的自由をもつ。
- ・他人の指示を受けず、自分なりのやり方で仕事をする。

5) 博愛 (Benevolence)

他人のためになることをし、他人と共に分け合い、不幸な人々に助力の手を差しのべ寛大であること。

[質問例]

- ・不幸な人々と友人になってあげる。
- ・他の人々のために仕事をする。

6) 指導 (Leadership)

他の人々の行動に責任をもち、他の人々の上に立ち、リーダーになること。

[質問例]

- ・重要な仕事をしたり大切な役についたりする。
- ・他人から頼りにされる人物になる。

2. 調査の方法と内容

K医療短期大学介護福祉科の最終学年である2年生

を対象に KG-SIV 調査を行った。今回、比較対照はO医療技術短期大学看護系学生最終学年である3年生との年齢差は2年未満であった。

2002年4月に KG-SIV を実施した。KG-SIV は上記6尺度を調査するために、個々の項目がそれぞれの人にとって「これは重要だ」とか「これは大切だ」と考えている事柄を3つ一組、全体で30組提示している。

例えば、

- ・自分の思うままに自由にやれる。
- ・他人が私のすることに同意してくれる。
- ・不幸な人々と友人になってあげる。

といった項目の中で、自分が「最も重要だと思う項目」をまず選び、次に残った2項目の内、「より重要でない」と考える項目」を選択させるものである。

3. 調査の結果

男子学生、記入不備などのものを除き、分析対象にしたデータ数は62名であった。表1に KG-SIV スコアの平均および標準偏差値を示し、それをグラフ化したものが図1である。

介護福祉科学生と看護系学生の各6領域における平均値の差の相違をみるためにt検定を行った。

介護福祉科学生と看護系学生との6つの領域における差について、結果として次の傾向があると考えられる。

- 1) 有意に差が見られたのは「同調」、「承認」、「博愛」の3つの領域であった。
- 2) 「同調」と「博愛」については看護系学生の方が有意に高く、逆に「承認」については介護福祉科学生の方が有意に高かった。
- 3) 6領域について介護福祉科学生は、ばらつきが少なく、看護系学生は分散傾向にあるといえる。
- 4) 「支持」、「独立」、「指導」の領域では2つのグル

表1 介護福祉科学生と看護系学生との KG-SIV 得点

	介護福祉専攻2年生N62		看護専攻3年生N63		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
支 持	18.6	3.5	18.0	4.2	n.s.
同 調	15.2	4.2	17.2	3.9	**
承 認	11.7	3.9	10.0	3.7	**
独 立	14.1	4.4	13.0	5.5	n.s.
博 愛	18.2	4.3	20.7	4.8	**
指 導	12.1	4.5	11.3	3.6	n.s.

P<.05……* P<.01……** n.s.……有意差なし

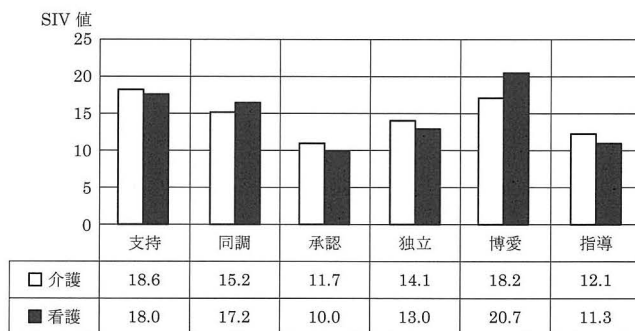


図1 介護福祉科学生と看護系学生の対人関係価値の比較

ープ間には差異はなかった。

- 5) 介護福祉科学生の場合、重視している領域を高い順に並べると、「支持」、「博愛」、「同調」、「独立」、「指導」、「承認」であったが、看護系学生のそれは、「博愛」が突出して高かった。以下「支持」、「同調」、「独立」、「指導」、「承認」の順となった。また、「承認」については極めて低いことが分かった。

4. 考 察

以上の結果を概観すると幾つかの事柄が推察できた。看護系学生が最も重視している「博愛」は本来、他者のためになることをし、不幸な人々に助力の手を差し伸べることを意味するものである。自惚れや自己満足というレベルでの価値意識を超越して、あるいは自分の利益につながることは二の次にして、目の前にある困窮している人のために純粋に助力を惜しまないことであろう。近年の都市化傾向は「隣は何をする人ぞ」の感が強固なものとなり、互いに関わり合わないことが、個人を尊重するマナー、美徳とされる風潮の中で、「博愛」は一見、若者の志向に逆行するかのようである。その「博愛」の領域は看護系学生と介護福祉科学生との間に有意の差が見られた。看護系学生が「博愛」を最上位に置いたのに対し、介護福祉科学生は、「支持」を一番高いものに置き、「博愛」をそれに次ぐものとしている。

介護の対象になるのは、身体に障害を持つ人や重症心身障害（児）者等のいわゆる社会的弱者、あるいは、寝たきり、痴呆といった要介護の高齢者である。本来ならば介護福祉科の学生にとっても「博愛」の領域こそが最上位価値にあるべきであろうが、「支持」がその上にあることの意味は次のような理由が考えられる。「支持」とは、人から理解をもって扱われ、勇気付けられ、親切や思いやりをもって扱われることを含んでいる。三澤ら¹⁰⁾によると、介護福祉士の場合、国家資格としての制度が誕生して15年にしかならず、未だ社会認知度が低い。また、看護師と異なり、業務独占ではなく単なる名称独占に過ぎない。名称独占である以上この種の業務は誰が実施しても罰則規定はなく、その分、専門職としての介護福祉士への理解度も低いといった指摘をしている。従って、自己の専門職である介護業務への社会的認知の低さの裏返しとして「支持」という領域が最上位価値として調査結果に現れたものと考えられる。

次に「同調」という領域については看護系学生の方

が介護福祉科学生よりも有意に高いことが分かる。「同調」とは決められた規則に従って社会的に妥当な行動をすることを指すが、近年の医療はまさにチームケアがその主流になっていることも一つの原因といえる。医師も含めて異職種スタッフが互いに協力共同して患者の生命を預かるシステムの一翼を看護師も担うことが求められている現在、決められた規則の中で自己の守備範囲を完遂しようとする傾向が強いことは理解できる。介護福祉士の場合、介護現場では、医師や理学・作業療法士との連携は求められるとはいえ、生命の維持よりも、より快適な生活（暮らし）の実現が大きな課題である。これが有意な差異が生じている理由と考えられる。

「承認」の領域については、看護系学生よりも介護福祉科学生の方が高かった。看護系では最も低い領域である。医師、看護師という伝統的な職種では誰がリーダーシップを取るか、また他のスタッフはリーダーから出された指示を実行していくという作業手順が殊の外大切にされているし、実際生命の維持という課題を効率よく推進するためには必要不可欠であろう。そういったことを学んでいる看護系学生は自己実現という概念を業務の中である程度放棄していかざるを得ないのではなかろうか。看護師はバーンアウト（燃え尽き症候群）に陥りやすいという報告^{11,12)}もあるが、空虚な疎外感を少なからず感じているようにも認識できる。介護福祉士の場合、介護保険がスタートして以降、利用者の介護の計画はケアマネージャー（介護支援専門員）が中心となってネットワーク、社会資源を駆使して、利用者自身、家族等の意見を反映、考慮する形で立案することが一般的である。この違いが「承認」という、いわゆる、他人から重要な存在としてみられ、好ましいと思って注目され承認を受けることに価値を置いている理由であると考えられる。

本研究においては、調査対象者(N)はほぼ同数であり、共に数ヶ月後には専門職として対人援助にあたるという点では共通している。しかし、対象者の年齢、調査時期のタイムラグがあり、当然この間の文化の違いや社会的な価値観もより多様化していることは否めない。従って、この調査結果が一般化するためには他学科の協力を得ながら調査を継続していかなければならないだろう。

本研究は介護福祉科学生と看護系学生との対人関係価値の比較を目的に調査を行い、それらのもつ価値観、言い換えるならば対人援助にあたる際の個人の動機付

けの違いから知見を得ようとしたものである。そこで、対人関係における価値について少し考えてみたい。看護業務にせよ、介護業務にせよ対象は人である。いくら機械化が進むにせよ、人への看護や介護はやはり血の通った人間が担わねばならない役割であることははっきりとしている。また、単に機械化されないところを人間が対応すれば事足りるものではない。

人と人とが向かい合うことによって初めてその業務の遂行が可能となり、病む人や介護の必要な障害者や高齢者の欲求に的確に対応し、相手の持つ不安や葛藤、問題行動にまでも対応を求められる専門職である。

本来、価値とは、「…は良い」という形で、何かについて述べられるよさ（善、正）という性質のことである。しかし、その「何か」つまり価値の担い手が本論文では、「支持」、「同調」、「承認」、「独立」、「博愛」、「指導」の6領域である。従って、あるべき（看護あるいは介護という果たすべき）行為への動機付けの際に、「自分は何を大切に考えているか」、又は「なにを善なること、もつべき理念と考えているか」をみようとしている。

その結果として上述したように、看護系学生は「博愛」という領域に最も高い、良きこととしての意味付けをし、介護福祉科学生は「支持」という領域に価値を置いたのであろう。そして、「同調」、「承認」に有意な違いが見られたのである。

ところで、介護ということに焦点化して述べるならば、対象者の生きる意欲と喜びとを取り戻すに当たっての援助が介護福祉士の主たる業務である。このような目的を実現するには当然、目的意識を持って主体的に対象者に働きかけねばならない。その際には対人関係において、一方が主であり一方が従であるという関係であってはならない。患者および利用者、要介護者という違いはあるが、対象者に「生きていて良かった。今が幸せです」と言ってもらえるような援助のあり方、それに直結するともいえる動機付けの部分は極めて大切と言わねばならない。

今後、介護福祉士養成の一翼を担う者として、入学時、卒業直前の時期に調査を経年的に行い、その変容を確認し、教育の効果を検証する一助として位置付けたいと考えている。又、今後は他学科の協力もいただ

きながら学科間の学生の価値観がどのように違うのかについても調査を続けてみたい。

謝 辞

岡山大学経済学部の永田博先生には、KG-SIV 調査に関するご指導を最初の段階から戴いたことに厚くお礼を申し上げます。また、吉備国際大学の橋本勇人先生には調査データの統計処理に関して多大のご指導をいただきましたことに厚くお礼を申し上げます。本論文執筆にあたり適宜適切な助言を頂いた山根正信先生に心よりお礼申し上げます。

文 献

- 1) Gordon LV : Manual for Survey of Interpersonal Values, Chicago : Science Research Associates, 1975
- 2) Kikuchi A and Gordon LV : Evaluation and cross-cultural application of a Japanese form of the Survey of Interpersonal Values, Journal of Social Psychology, 69 : 185—195, 1966
- 3) 永田 博, 近藤益子, 小川節子, 大羽 稔 : 看護学生における対人関係価値の学年変化とその教育的意義, 看護教育 31 : 484—490, 1990
- 4) 永田 博, 近藤益子, 小川節子, 大羽 稔 : 看護学生における対人関係価値の学年変化, 看護展望, 16 : 96—102, 1991
- 5) 永田 博, 武内信子, 小川節子, 近藤益子, 大羽 稔 : 看護学生における対人関係価値の学年変化—看護系高校生と非看護系大学生による検討—, 看護展望, 17 : 92—100, 1992
- 6) 永田 博, 近藤益子, 大羽 稔 : 看護学生における対人関係価値の学年変化—縦断的研究法による内的妥当性の検討—, 看護研究, 27 : 41—48, 1994
- 7) 永田 博, 小川節子, 近藤益子 : 看護学生における看護関連諸概念の情緒的意味, 看護展望, 20 : 88—95, 1995
- 8) 加藤久美子, 近藤益子, 多田政子, 永田 博 : 看護学生における対人関係価値のコホートによる相違, 岡山大学医療技術短期大学紀要, 7 : 129—134, 1996.
- 9) 永田 博, 加藤久美子, 笹野完二 : 4年制看護課程入学者の対人関係価値 : 3年制看護学生, 非看護系学生との比較, 岡山大学医学部保健学科紀要, 10 : 29—34, 1999.
- 10) 三澤昭文 : 介護における人間理解, 東京 : 中央法規出版, 1999.
- 11) 田尾雅夫, 久保直人 : 看護婦におけるバーンアウト—ストレスとバーンアウトとの関係, 実験心理学研究, 34(1), 1994.
- 12) 稲岡文昭 : Burnout 現象と Burnout スケールについて, 看護研究, 21(2), 1988.